

六 わたしの荷は軽い

マタイによる福音書 十一章二十五節―三十節

二〇〇九年六月七日礼拝説教

秋吉隆雄 牧師

今日与えられました御言葉は、マタイによる福音書十一章二十五節から三十節までです。もう一度全文をご覧いただきたいと思います。「そのとき、イエスはこう言われた。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。』

前半は、イエス・キリストの祈りです。後半はイエス・キリストの招きです。この御言葉には本当に深い慰めがあります。この御言葉によって、どれくらいの人々が励まされ勇気づけられてきたでしょうか。この御言葉は解説などしなくても、真直ぐにわたしたちの心の中に入ってきます。下手な説明など不要で、むしろ妨げになりそうです。しかし、ここで説教を終わるわけにはいきませんので、違う角度から少し自由なお話をしたいと思います。

わたしたちの教会で、プロポリスを販売しています。このプロポリスは、ブラジルの佐々木神父のフマニタスという施設で作られています。大変質が良くて、市販のものよりも安いものですから、よく利用されています。販売が、佐々木神父の活動に少しばかりの支えになっています。佐々木神父が、三年ぐらい前に帰国された時、「なか伝道所」で講演をしてくださいました。神父はブラジルに渡って、初めはハンセン病者と出会い、彼らのための施設を造ろうと出発したのです。しかしその後、働きは多方面にわたり、麻薬やアルコール依存症の方々の更生施設、それから農業指導にも手を広げたのです。ブラジルには土地を持っていない農民がいます。土地なし農民を「センターハ」と言うようですが、彼らの土地取得の支援活動などもしています。これは危険が身に及ぶ危ない仕事です。要する

に、生きることに多大な困難の中にある人々を支え、自立に向かって手助けする奉仕をしています。佐々木神父は、彼らは弱い人ではない、社会によって弱くさせられた人々であると力説していました。そして彼らとの交流の中で、ブラジルの警察権力、司法権力、これらは金持ちに有利になるように働き、貧しく苦しくさせられている者の権利を認めず、味方には決してなつてくれないとブラジル社会の不正義をご自身の痛みの中で切々と語られました。

この問題はブラジルだけではなくありません。ヤン・ソギルという在日の小説家があります。彼は激しい文体で書く人ですが、タイのエイズ問題や臓器移植問題についても書いています。ヤン・ソギル氏は、小説を書く時には綿密な調査をするそうです。彼の書いた、タイの現状も目を覆うばかりです。正義と法を守るべき警察は、自らの利益のために貧しい者、苦しむ者を虐げ放題で、権力の腐敗を明らかにしています。

中国で天安門事件が起こりました。民主化を求める若者たちが、天安門広場に集まった時、政府はこれを弾圧して、三百余人、桁が違ふと言われていますが、無防備な若者が国家の力によって抹殺されました。その天安門事件から二十年が経ちました。中国政府はこの事件に関して全く明らかにしようとはしない。あたかも無かったかのような姿勢をとり続けています。けれども、天安門広場で流された血の叫びは、歴史の中に消えることはないでしょう。権力の横暴の問題は、他国だけの問題ではありません。私は、『週刊金曜日』という週刊誌を読んでいますが、先々週は、「膨張する公安」がテーマでした。現在の日本では、警察権力、公安が膨れ上がって、政府にとって都合の悪いものは、公安の力によって次々に抑えつけられている。労働問題、天皇制問題、教育問題など、あらゆる方面において警察権力が人間の自由を抑える力として働いている。そのような公安の膨張をテーマにした報告がなされていました。

佐藤優という外務次官だった人がいます。現在膨大な数の本を執筆して、本屋にはずらりと並んでいますので、皆さんもご承知と思います。佐藤氏は、背任の容疑で東京地検特捜部から起訴され、現在裁判中です。ですから佐藤氏自身は、自分のことを「起訴休職外務次官」と言っています。佐藤氏が初めに書いた『獄中記』という本があります。獄中で考えたことを書いたものですが、彼は、自分の逮捕、起訴は国策捜査である、取調官からもそう聞いたと書いています。「国策捜査」というのです。戦時中は「治安維持法」がありました。この治安維持法に

よって、国家のあり方に文句を言う者を、すべて逮捕していきました。現在、治安維持法はありませんけれども、その代わりが国策捜査というわけです。国家にとって都合の悪い者は、逮捕・起訴し、裁判で徹底して有罪に持ち込んでいく。

この国策捜査で有罪判決を受けた人が何人もいると言われています。民主党の小沢一郎氏の秘書が、西松建設からの献金問題で逮捕されました。そのために小沢氏も民主党の代表を辞任しました。私は、小沢氏のお金の収支に関してはクリアでないと思っています。けれども小沢氏は、政治家たちの中では献金額の多さは七十何番目かだそうです。小沢氏よりたくさん集めている政治家が七十人以上いるわけで、彼らを叩けばいくらでも埃が出ると言われています。それなのに小沢氏がターゲットにされた。ここには国策捜査により民主党を潰そうという狙いがあるのではないとも言われています。その真偽は分かりません。けれども、権力は常に自己正当化し、自己増殖を図ります。周りの反対する者を押さえ込んで拡大を図っていきます。私は勿論、反権力主義者でも無政府主義者でもありません。権力が国民の生活を守る、そのために国民が権力を託しているわけです。けれども、権力のいたずらな増殖を図る力に対して、目を開いておくことは国民の良心で、そしてそれは隣人への愛です。

聖書が伝えるイエス・キリストは、まさに治安維持法によって挙げられ、国策捜査によって葬り去られた方です。神の律法は、神を信じ隣人を愛せよというものでした。けれども、律法学者たちはその律法を、人を罪に定めて排除する道具としてしまったのです。イエス・キリストは、そのような律法を廃棄して、本来の律法の意味を取り戻そうとしたのです。しかし、それが治安維持法に反するとされたのです。そして国策捜査によって、エルサレム神殿当局はイエス・キリストを捕らえ、あらん限りの侮辱と苦痛を与えました。そこで引き出された罪は、神への冒瀆罪、自らを神と等しい者としたという罪でした。この神への冒瀆罪は、彼ら自身の手で死刑にすることができません。ところが彼らは、自分たちの手を汚すことをしないで、ローマ総督ピラトの手で死刑にしていたのです。それは、民衆のイエス・キリストに対する信頼と愛を恐れたからです。彼らはピラトに対して、自分たちには死刑執行権がありませんと言っていますけれども、宗教に関しては死刑にする権利を持っていました。ステファノが最高法院で証言しました。その証言はエルサレム神殿を冒瀆するものであると、怒った民衆は、ステファノを町の外に連れ出し、石を投げて殺しています。石打ちの刑で死刑にしたのです。

イエス・キリストも同じ手法で葬り去ることができました。けれども神殿当局は、自分たちの手を汚さずにピラトの手で殺していったのです。権力の捻じ曲がった横暴です。

初めに申しました佐々木神父は、ブラジル社会で貧しく弱くさせられている者が、警察権力や司法権力に見放され、不正不義が横行している実態を語られました。その後、佐々木神父は今日の御言葉、イエス・キリストの祈りの言葉を語られたのです。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、それは御心に適うことでした。」「これらのこと」とはイエス・キリストが現された福音です。人は神様の祝福の中で命が与えられ、その命は神によって絶対的に良しとされている。神の是認の下で、「共に生きる」という福音を示されたのです。ところが、この福音は知恵ある者、賢い者には隠されていました。知恵ある者、賢い者は世の中で力ある者に身を寄せて、「世の中なんてこういうものさ」とふてくされ、平気で苦しむ者、悲しむ者を足蹴にする。しかしイエス・キリストはこう祈っています。「この福音は、幼子のような者に示されました。そしてそれは神の御心に適っています。」佐々木神父はこの言葉を幾度も引用されて、「皆さん、幼子のように福音を受け入れる者になりましょう」と語られました。佐々木神父はもう八十歳を超えています。その方が、「幼子のようになれ」と言われるのです。

この時、イエス・キリストはガリラヤにおられました。ガリラヤで神の国のリアリティを示されたのです。民衆はイエス・キリストの周りに黒山のように群がっていました。彼らは、政治的にはローマ帝国に支配されていました。経済的にはローマと結んだ領主、地主から税金を収奪されていました。そして宗教的にはエルサレム神殿、そしてファリサイ派の人々から、律法という神の名による支配を受けていたのです。あらゆる面において、彼らは意気阻喪していました。聖書は一言で彼らのことを「飼う者のいない羊」とたとえています。貧しく苦しくさせられた彼らは、自分を守る知恵を持たない、また世の中に対して抵抗する賢さもない。イエス・キリストは彼らに「あなたがたは神に良しとされ、神に祝福されている。共に分かち合って生きよ」と語られたのです。この福音を、彼らはそのまま幼子のように受け入れ信じました。そしてそれを望みとしたのです。その民衆にイエス・キリストは、このように語られています。二十八節です。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」彼らはみな疲れた者、重荷を負うガリラヤの民衆でした。政治的、経済的、そして宗教的にも追い立てられている彼らに対してイエス・キリストは「わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言うのです。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。」岩波訳の聖書は「私は柔和で心が低く、あなたがたは自分の心に安らぎを見出すであろう」と訳しています。この言葉は、旧約聖書イザヤ書五十三章の「主の僕の歌」と重なって見えます。神様が遣わされた主の僕は何の不平も言わず、黙々と苦しみと痛みを耐え、そのことによつて人間の傷を、人間の罪を担い続けた。イエス・キリストは、心を低くして人に柔和に仕える。だから、「わたしの軛を負いなさい」と言われるのです。

軛というのは、畑を耕す時、家畜の背中に軛を付けてそこからロープを引き、鋤に結びつけます。それを家畜が引つ張り畑を耕します。ですから、軛という言葉は決してプラス・イメージの言葉ではありません。他国に占領支配されることを「律法の軛を負う」と表現します。また、ペトロもパウロも、律法を強制されることを「律法の軛を負う」という言葉を使っています。自由を失い、支配される様子を、軛を負うと言うのです。けれどもイエス・キリストは、「わたしの軛を負え」、そして「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」と言うのです。日本の農村で田畑を耕す時、かつては家畜が使われていましたが、その家畜は、牛や馬、必ず一頭に軛を付け、そこから鋤に結びつけていました。イスラエルの場合、必ずロバを二頭並べ、二頭に軛を付けてそこからロープを引くのです。ここで言うておられることは、一頭はもちろんイエス・キリストの周りに群がった、苦しむガリラヤの民衆の一人ひとりです。そして隣のもう一頭は、イエス・キリストご自身です。イエス・キリストが、あなたがたの隣で同じ軛を負ってください。わたしが、イエス・キリストが隣にいるから、軛は負いやすく、荷は軽い。だから「わたしの軛を負いなさい」と言うておられるのです。この軛は、もちろん木製です。イエス・キリストは大工でした。ギリシア語でテクトーンと言いますが、このテクトーンは、木工大工を意味しています。石の家を造る石工ではありません。イエス・キリストは木工大工ですから、軛も作ったのではないか。そしてイ

イエス・キリストが作られた軛は、家畜の背中に優しくかつたと、美しい想像を語る人もいます。イエス・キリストは、本当に柔和で心の低い方です。ですから、苦しむ者、悩む者の思いを、自らの事柄として受け止めてくださるのです。イエス・キリストの負われた軛、十字架にわたしたちの解放、救いがある。これが、聖書が告げる福音です。そして今日の御言葉は、その核心について語っています。わたしたちが負っている人生の重さ、それを隣でイエス・キリストが一緒に負ってください。あなたは、このイエス・キリストに託して、「重荷を負いながら、今を精一杯生きなさい」という慰めの言葉です。

イエス・キリストが共に軛を負ってくださいっているということは、「あなたがたも隣人の軛と一緒に負ってあげなさい」という言葉に繋がっています。イエス・キリストは、「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」と言っています。十字架を負われたイエス・キリストに学ぶということは、隣人の軛と一緒に負う者になっていくということです。その時に、更にイエス・キリストによって与えられた恵みの事実がどんなに大きいものであったのかが見直されてきます。「わたしの荷は軽い」と言ってくださいる方に、すべてを託して、隣人と一緒に重荷を負って、イエス・キリストに学び、イエス・キリストに従う。それがわたしたちの信仰で、そこに真に生きるという福音が約束されています。「わたしの荷は軽い」。この言葉を今日の礼拝で心に深く覚えたいと思います。